

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

鯉のぼり

平成28年5月第1週放送

五月の青空にはためく鯉こいのぼり。なぜ「鯉」を上げるのでしょうか。

これは、中国の伝説がもとになっています。黄河こうがの上流に「竜門りゅうもん」という滝があり、鯉がその滝を登ることができた時、竜になるというものです。「鯉の滝登りたきのぼ」と言ったりもしますが、これは大きく成長することをあらわしているといえるでしょう。立身出世りっしんしゅっせの意味にもつながり、「登竜門とうりゅうもん」という言葉はここから来ています。

この伝説にちなみ、鯉こいの幟のぼりを空高くあげ、子どもたちの健やかな成長すこを祈るのです。

道元どうげん禅師も、竜門の伝説を引いて、弟子たちに説いています。

海の中に竜門という所がある。そこは波がしきりに打ち寄せる所である。いろいろな魚がこの波の所を過ぎると、必ず竜になる。

この竜門という所は、ほかの所と波がちがっているわけではない。けれども、不思議な力によって、魚がここを通ると必ず竜になるのである。

魚のからだは、そのままでありながら、たちどころに竜となるのである。

「滝」であるところが「海の中」になっているなど、若干の違いはあるにせよ、言う所はほぼ同じでしょう。

鯉が竜門を登ると、竜になる。しかし空にはためいている幟のぼりは、竜ではなく、鯉です。これはどういうことでしょうか。

道元禅師の言葉には「魚のからだは、そのままでありながら、たちどころに竜となるのである」とあります。つまり、“鯉は鯉のまま竜になる”ということです。姿が竜になるのではなく、鯉の内面ないめんが変化するということでしょう。

私たちににとっての「竜門」とは、何でしょうか。

道元禅師は、竜門を、禅の修行道場の喩たとえとして用いています。修行道場は、場所も、食事を取ることも、他の場所とそれほど変わりはないけれど、そこに入れば、必ず仏ほとけとなる、と示されています。

禅の修行は、坐禅ざぜんを基本としますが、食事や掃除、入浴など日常の行いを丁寧に、行くことを大切にします。それらを、丁寧に心をこめて行うことが、すなわち修行なのです。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

私たちの「竜門」は、日常生活そのものであるといえます。日常生活を丁寧に心をこめて行う時、私たちは「竜門」を登っているのです。

— 終 —